

「ナルドの香油」

マルコの福音書 14:1～9

はじめに

今日の箇所は、イエシュアが十字架にかかれ、そして死なれること、墓に葬られることを予表し、指し示す出来事としてよく知られる箇所です。また一人の女性が「ナルドの香油」という、自分が最も大切にしていた価値あるものをイエシュアにささげたという、神への献身的な、犠牲的な行いが賞賛され、これを読む者にも同様の行いを促す、勧め、教えとしてよく用いられる箇所です。しかしこれをヘブル語の視点で、神のご計画の視点で捉え、さらに前回までの13章における「世の終わりに近づくときのしるし」についての文脈の流れをもって読み解くならば、また違った解釈を導き出すことができます。それでは早速読み進んでまいりましょう。

1. 二日後に迫る

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:1 過越の祭り、すなわち種なしパンの祭りが二日後に迫っていた。祭司長たちと律法学者たちは、イエスをだまして捕らえ、殺すための良い方法を探していた。

14:2 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民が騒ぎを起こすといけない」と話していた。

「過越の祭り」そして「種なしパンの祭り」、これらの祭りは出エジプト記12章において、神がイスラエルの民に定められたものです。その経緯を簡単に説明しますと、かつてイスラエルの民がエジプトの地で奴隷となっていた時代、彼らはその奴隷の激しい苦しみの中でうめき、そして叫びました。すると神は預言者モーセを召し出し、イスラエルを苦しめたエジプトに対し、神はこのモーセを通して、激しい災害、天変地異によってこれを打ち、イスラエルを奴隷の中から解放しました。その最中で定められた「過越の祭り」と「種なしパンの祭り」この二つの祭りには、世の罪を取り除く神の子羊イエシュア、すなわちイエシュアの十字架の死と、そして究極的には世の終わりに地上に再臨され、獣と呼ばれる反キリスト「荒らす忌まわしいもの」を打ち、その脅威からイスラエルの民を救い出されるメシアなるイエシュアによる神のご計画が指し示されているのです。そのような意味を持つ祭りが「二日後に迫っていた」とここには記されています。この描写は単なる状況説明などではなく、前回までのマルコ13章において、「世の終わりに近づくときのしるし」としてイエシュアが語られた「これらのことが起こるのを見たら…人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい（マルコ13:29）」という御言葉と結びつくものであると考えられます。つまり13章で述べられた獣の暴挙と教会の携挙を見たら、いよいよ人の子すなわちイエシュアが「戸口」に立たれ、入って来られるということ、すなわちイエシュアが地上に再臨され、かつてのエジプトのようにイスラエルを苦しめた獣とその国々を打ち滅ぼし、イスラエルを救われるということがこの14章には表されていると考えられます。

またこの記述の、目に見える状況としては、祭司長たちと律法学者たちがイエシュアを殺す計画を立てているという場面ですが、ここで彼らは「祭りの間はやめておこう」という結論に至っています。しかし実際には、過ぎ越しの祭の真っ最中にイエシュアは捕らえられ、そして十字架にかけられます。つまりこ

これは祭司長たちと律法学者たちの計画によるものではなく、人の思いや考えによるものではないということが示されており、それはすなわち人の計画ではなく神のご計画、神の御心によってイスラエルに救いをもたらされるということが示されているものであると考えられます。イエシュアの十字架の死による、罪の贖いの御業も、そしてイエシュアの地上再臨によるイスラエルの救いの御業も、いずれもただ神のご計画によるものであることが、ここには表されていると言えます。それが「二日後に」間近に迫る時、すなわち人の子が、イエシュアが「戸口」に立つその時、その日に何が起こるのか、それが次の出来事の中に「型」として表されています。

2. ナルド

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。

まず「ベタニア(בֵּיתַנְיָה)」ヘブル語で「悲しみの家」という意味を持つこの村に、聖書において神の呪いを象徴する病「ツアラアト」これに「冒された人シモンの家」があり、そこにイエシュアが入って行かれた事実が見られます。これもまた単なる状況説明ではなく、神のご計画を表す「型」と見ることができます。それはつまり終わりの日に起こる出来事を表しており、「荒らす忌まわしいもの」獣と呼ばれる反キリストによって汚され、背教の場所となるエルサレムの神殿がこの「ベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家」の姿にたとえられているということです。ここにイエシュアが来られた、とどまられたという事実の中に、イエシュアの地上再臨の「型」が見られます。イエシュアはこの「シモン」を癒し、悲しみと苦しみの場所となっていたその家を、憩いの食卓へと変えられました。ここに終わりの日、イエシュアが地上に再臨され、獣を打ち滅ぼし、エルサレムの神殿をきよめてこれを立て直し、そこにとどまられるという神のご計画の「型」が表されているのです。

そして一人の女性がやって来て「純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注」ぎました。この「ナルド(נָרְדוּ) 油」とは初め、以下の歌の中で使われました

雅歌【新改訳 2017】

1:12 王が長椅子に座っておられる間、私のナルドは香りを放っていました。

王の「長椅子」と訳されているメーサヴ(מֵסַבִּי)は本来、神殿の四方の内壁（I列王記 6:29）を意味する言葉で、つまり王が神殿の中に入られること、すなわちイエシュアがイスラエルの王としてエルサレムの神殿に入って来られることを表した歌であると考えられ、「ナルド」はその事実を指し示すものであると言えます。またその「香り」ヘブル語でレーアハ(רֵאחַ)というその香りは本来、神がノアに告げられた御言葉を指し示すものです。

創世記【新改訳 2017】

8:20 ノアは【主】のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜から、また、すべてのきよい鳥からいくつかを取って、祭壇の上で全焼のささげ物を献げた。

8:21 【主】は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で【主】はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらはしない…わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。」

これはノアの洪水の出来事の最後の場面です。大洪水が収まり、箱舟から出たノアがささげたいけにえの「香り」レーアハによって神はこのように仰せられたのです。つまり「ナルド油」とその香りには、神がもはや「生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない」という約束が表されているのです。神がお選びになったノアとその箱舟に入ったものたちが生かされたように、イエシュアの地上再臨、すなわちイエシュアが王なるメシアとしてエルサレムの神殿に入って来られることによってイスラエルの民とそれにつながるすべての者が救われ、もはや二度と滅ぼされるようなことがなく、永遠に守られるということが、この一人の女性がイエシュアのために持ってきた「純粋で非常に高価なナルド油」には表されていると考えられます。

またこの「ナルド(נָרְדִּי)」はヘブル語で見ると「降りる、下る」という意味のヤーラド(יָרַד)に一人称複数の意味を表すヌーン(נ)が頭に付いたものとしても見ることができ、つまりそこには「私たちは下って行こう」という意味が秘められた言葉と見ることができ、これもまたイエシュアの地上再臨を指し示すものであると考えられます。

ユダの手紙【新改訳 2017】

1:14 アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。」

1:15 すべての者にさばきを行い、不敬虔に生きる者たちのすべての不敬虔な行いと、不敬虔な罪人たちが主に逆らって語ったすべての暴言について、皆を罪に定めるためである。」

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

「**何万もの聖徒**」また白くきよい亜麻布を着た「**天の軍勢**」とあるように、イエシュアはお一人ではなく非常に多くの御供を引き連れて地上再臨されます。それは先に「終わりに近づくときのしるし」として携拳された教会の聖徒たちであると考えられ、その事実が「私たちは下って行こう」という、イエシュアとともに天から下る者たちの存在がこの「**ナルド**(נַרְדִּי)」というヘブル語には表されているとも考えられます。

そして女性はこのナルドをイエシュアの「**頭に注いだ**」ともあります。ここに使われている「注ぐ」という意味のヤーツァク(צָצַק)という言葉は、以下の出来事で最初に使われました。

創世記【新改訳 2017】

28:10 ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった。

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。

このように聖書で最初に使われたヤーツァクもまた「**頭に油を注いだ**」という意味であり、そしてそれは神がアブラハムとその子孫すなわちイスラエルと交わされたこの契約の成就と、イスラエルの民が神のみもとに立ち返り、そして「**ベテル**」すなわち「**神の家**」「**神の国、御国**」が「**石の柱、柱の頭**」にたとえられている王なるメシア・イエシュアによって建てられるのだということが指し示された言葉なのです。ですからイエシュアの頭にナルド油が注がれたというこの出来事の中には、**イエシュアの地上再臨によって、かつて神がアブラハムと交わされた契約が果たされる**ということが指し示されていると考えられます。

3. 福音の記念

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。

14:5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。

14:6 すると、イエスは言われた。「彼女を、そのままにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。

14:7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。

14:8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。

14:9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

イエシュアは「わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません」と言われ、また「埋葬」とも言い換えて、ご自分が天の父のみもとに行かれることを示しておられます。それは先ほどの「ナルド」が指し示した神のご計画、すなわち終わりの日に天から下って来られるためです。天に上ることなくして天から下ることはできません。王なるメシア・イエシュアの地上再臨、これこそ「福音」のしるし、象徴であり、決して忘れてはならない、覚えなければならないもの、すなわち「記念」です。イエシュアの頭に注がれたナルド油の出来事には、その事実がまさに表されているのです。

このように、「福音」とはイエシュアが来られること、イエシュアの地上再臨によってもたらされる数々の出来事のことであり、今日の箇所に記載されたベタニアのシモンの家においてイエシュアにナルド油が注がれた出来事には、神のご計画としての以下の出来事が「型」として表されていると考えられます。

イエシュアは…

- ・先に携挙された教会を、聖徒たちを引き連れて、天からこの地に下って来られる。
- ・「荒らす忌まわしいもの」である獣、反キリストとそれに従うものを打ち滅ぼし、イスラエルの民を救い出される。
- ・イスラエルの王として即位し、エルサレムの神殿をきよめ、これを回復される。
- ・イスラエルの民に対し、アブラハムと交わされた神の契約を果たされる、すなわちこの地上に「神の国」を建てられる。

4. 小さな壺

イエシュアのために女性が持って来たナルド油の壺は「小さな壺」でした。しかしそれをイエシュアの頭に注ぐと、「わたしのからだに…香油を塗ってくれました」とイエシュアが言われたように、それはイエシュアの全身を覆うものとなりました。そのように考えると、一つの詩篇が思い出されます。

詩篇【新改訳 2017】

133:1 見よ。なんという幸せなんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。

133:2 それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。

133:3 それはまたヘルモンからシオンの山々に降りる露のようだ。【主】がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

イエシュアの地上再臨とは、携挙によって天上にいた教会と、地上に残されていたイスラエルの民が、兄弟となって地上で「一つになってともに生きる」ようになることでもあります。そして神である「【主】がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられ」るのです。それは「なんという幸せなんという楽しさ」でしょう。これこそまさに良い知らせ、まさに「福音」と呼べるものではないでしょうか。このように、イエシュアに注がれたナルドの香油の出来事には、イエシュアの地上再臨という「福音」の素晴らしい数々が、ぎっしりと詰め込まれているのです。それはまさに「純粹で非常に高価なナルド油の入った小さな壺」という描写に、見事に表されていると言えます。ハレルヤ！主の御言葉は本当に素晴らしい！そしてその御言葉のとおり、そのご計画がなる日を、心から待ち望みます。「主イエシュアよ、来てください」と祈ります。